Peter Brune

秘密基地に棲む楽天家。

6カ国の言葉を自在に操り、世界60カ国を渡り歩いた
旧東ドイツ出身の写真家が、東京でWebデザイナーとして活動している。
彼の名前はピーター・ブルーネ。いったいどのような経緯で
Webの世界へ辿り着いたのだろうか。
シンプルでスマートなサイトを次々と発表する
彼のWebデザインの本質に迫ってみる。

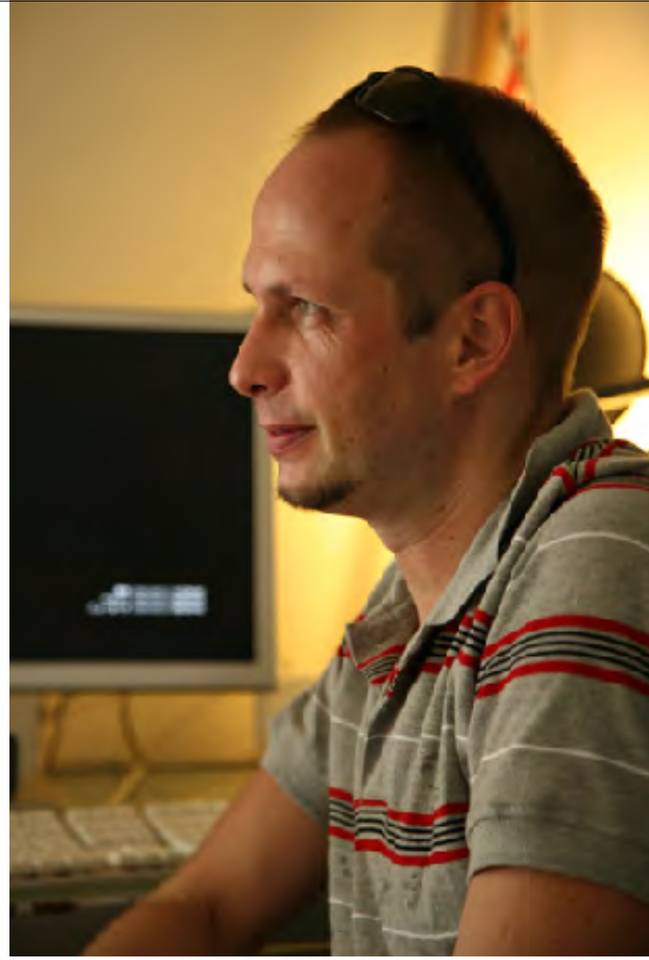
写真：小林岳夫 Kobayashi Takeo
構成・文：粟田和彦 Awata Kazuhiko

ピーター・ブルーネ

Webデザイナー、写真家／1964年旧東ドイツ生まれ。1988年よりカメラマンとして雑誌などを中心に活躍。1990年にパリへ移住後、グルジアやインドなどはじめ各国を訪問、雑誌に写真や文章を寄稿する。1997年にWebデザインを始め、その年にフンボルト大学へ入学。2000年に来日しフリーランス写真家とWebデザイナー「piichi.com」として活動。2006年東映（株）のバルトの楽園（がくえん）に映画出演。現在はフリーデザイナーとして奮闘中。1988年第9回ベルリン国際写真展。1998年第3回国際グルジア写真コンテスト審査員。2003年「日本におけるドイツ年2005-2006」のロゴコンテスト入選など 。

http://piichi.com
http://peterbrune.com

Peter Brune



生きたサイトをつくりたい

「旧東ドイツという国はヨーロッパにあったけれど、ちょうど島国のような感じね。日本の人にはちょっと理解できない感覚かもしれない」

89年に東西ドイツの壁が崩壊した時、ピーターはインドを撮影しながら放浪していた。彼が25歳の時だ。

「インドにいた時、テレビで壁が崩壊したと報道していた。だけど僕には信じられなくて、これはSFじゃないかって。壁は、僕が死ぬまでなくなることはないだろうと思っていたから。90年にパリに移り住んで、それからも世界のあっちこっちを旅行したね。写真を撮って、時々文章も添えて出版社に送ってお金をもらっていました。旧東ドイツでは自由に旅行ができなかったから、その反動かもしれない」

ピーターが写真を始めたのは、彼のおばあさんの影響である。おばあさんはカメラが趣味でたくさんの写真を撮っていた。過ぎ去っていく時間を記録する写真に彼も魅せられ、子どもの頃から現像やプリントを自分でこなしていた。東ドイツでプロのカメラマンとして生計を立てるようになり、東西ドイツの壁が崩壊してからは、60カ国あまりを旅行しながら撮影している。

大陸の中の島国

閑静な住宅地の奥まった共同アパートの1室が、ピーター・ブルーネの自宅兼事務所だ。最近、ここに引っ越したばかりだと言う。何度、訪ねても迷ってしまう秘密基地のような場所で、とても東京の一角とは思えない佇まいである。旧東ドイツ生まれのピーターは6カ国語を自在に操り、ワールドワイドに活躍するウェブデザイナーであり写真家だ。

遅咲きのウェブデザイナー

ウェブとの出会いは33歳の時。年齢的には、かなり遅いと言っていいのかもしれない。

「自分の写真のポートフォリオ（作品集）のサイトを作りたかったけれど、普通のサイトだと写真をダウンロードができてしまうから、フラッシュを2、3週間ぐらい勉強して作ったね」

この年にピーターは、フンボルト大学ベルリンに入学し、コミュニケーション学、映画学、日本学を専攻する。人間がどのようにコミュニケーションをとるのかに興味があったのだ。この思考はウェブにおいても生きている。

「フラッシュを使ってウェブデザインをするには、写真や映画の要素はもちろん、双方向性があるからコミュニケーションを考えることも大切」

日本食は大好きだとピーター。ラーメンとたこ焼きが好物で、納豆も食する日本通だ。ただしパンだけは別で、写真の黒パンをドイツの友人を通じて送ってもらっている。試食をさせてもらったが、日本人の持つパンのイメージとは異なりクッキーの感触に近い

ピーターのデスク周り。余計なものは排除されていてスッキリとしてる。写真右奥の杖は、富士登山の時のもの

生きたサイトをデザインする

普通のサイトにおける階層を考えると、縦・横・高さの広がりを持った3次元的だとするなら、フラッシュでは時間軸という概念を加えて4次元的に考えなければいけない。

「時間軸と言えば、映画のように思えるけど、ちょっと違うね。ウェブは見ている人とコミュニケーションができるから、スピードやリズム感や使いやすさを大切にしないといけない」

ピーターがサイトを構築する上で、もう一つ重要だと考えるのは『サイトのコンセプト』だ。当たり前のようだけれど、意外におざなりにされているケースはないだろうか。『このサイトは何のサイトか』をしっかりと確認する必要があるとピーターは力説する。

「多くの依頼者はよくばりですね。言いたいことがいっぱいあるのです。だけど、そのサイトで本当に必要な情報が何かをしっかりと掴んでいないと、よくわからないサイトになるね」

ピーターのデザインしたサイトを覗いてみると、シンプルだけど細やかな配慮がいろいろと組み込まれていて、思わずニヤリとしてしまう。

「そのサイトが伝えたい情報を最大限に引き出せるようなデザインを考えます。デザインやフラッシュが、あまり全面に出過ぎてもダメだし、それでは見ていてウルサイ感じになりますね。less is moreです。日本語で言えば『過ぎたるはおよばざるがごとし』かな。ほどほどのデザインがよくて、大声で目立つものや、見ている人が迷子になるようなサイトはよくない」

フラッシュの『技術ありき』では考えずに、コンセプトから一番必要なインターフェースが生まれてくる。

ピーターをインタビューしていて、時々、ドイツ人の気質を強く感じることがある。たとえば、アイデアのためのラフを一切描かない。デジタルスケッチ（本人談）にすれば無駄がないと言う。サイトの構築も全体を見渡すことで、一番合理的な方法論を模索する。だからと言って無機的なサイトではなく、たえず人間とコミュニケーションをとろうとする姿勢が表現されている。

デザインは島ではない

2000年にピーターは来日し、東海大学で日本語の勉強をしながら、ウェブデザインのスキルにも磨きをかけていく。2001年に、マガジンハウスのデジタルマッツのプロジェクトに参加。これが日本でウェブデザイナーとしてデビューになった。

「子どもの時は普通だったと思うよ。機械いじりが好きで、分解しては組み立てるとかね。今の日本と違って、娯楽はあまりなくて本と映画ぐらい。だから本はいっぱい読んだ。日本の文化にも興味があって、侍とか漢字も面白いと思っていたね」

漢字を勉強しないと日本語はわからないとピーターは言う。もしかしたら日本人よりも漢字を知っているのかもしれない。そんな彼の日本でのデビュー作品がデジタルマッツであったことは興味深い。『ウェブで雑誌を作る』というコンセプトで、フラッシュを駆使し縦組で構成されている。初期段階では一カ月で百ページ近いフラッシュページを制作しアップしていた。この膨大な量をこなすことで、彼のスキルも高まっていったのだろう。

「ウェブデザインは何かって考えると、いろんなものと繋がっているからね。デザインという島じゃないよ。だからコミュニケーションを考えることが大事です」

ピーターのデザインには、さまざまな経験がベースとなって生きている。今までで落ち込んだり迷ったことはないのだろうか。質問してみた。

「あまりないね。だって僕はオプティミスト（楽天家）だからね」と笑った。

彼はWebデザイナーと写真家の二つの顔を持っている。現在はWebデザイナーとしての活躍する場面が多くなっているが「写真も撮るけど、僕は好きなものしか撮らないわがままなカメラマンだからね」とピーターは笑う。窓辺に置かれた一眼レフのカメラは現役だ

日本は安全で、皆が親切で住みやすい国だと言う。「特にこの町は、昔ながらの日本が残っているようで大好き」

Chang Yomei 公式サイト 2005

http://www.yomei.co.uk/

ロンドン在住の画家・作家のChang Yomei（蒋友梅）氏のサイト。東洋的でスピリチュアルな雰囲気を表現したかったとピーター。Chang 氏の作品のイメージを大切にして、デジタルアートの作品としても楽しめる。ギャラリーでゆっくりと過ごすような時間をサイトの中で実現している

CL,II,W:Chang Yomei
CD,AD,F,HT:piichi.com

Gallery add2+ 2005

http://add-2.com/

渋谷にあるギャラリー「add2+」は音楽系の写真が中心だ。やはり作品がメインなので、カタログ的にならないようギャラリーの雰囲気を味わってもらう工夫がなされている

CL:株式会社add2+
CD,AD,F,HT:piichi.com

IWATAYA 2006

http://www.iwataya.co.jp/

福岡に本店がある老舗のデパート「IWATAYA」のリニューアルサイト。ピーターはFlash部分を担当し、新しくなったサイトを楽しく演出するため各コンテンツごとに、雑誌風のカタログ記事が掲載されている

CL:株式会社岩田屋
HT,W,Ph,GD:株式会社利助オフィス
AD,F,HT:piichi.com

peter brune *works*

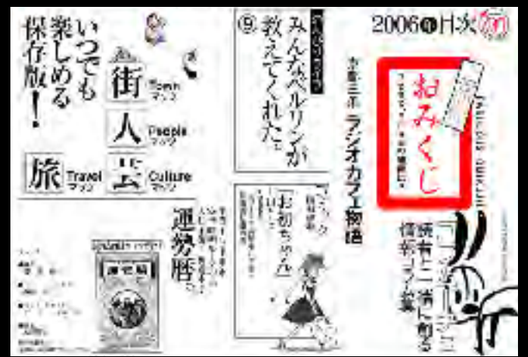
ピーター・ブルーネの仕事はさりげない。
ディティールに秘密があるようだ。
Flashのテクニックもデザインも決してでしゃばることはなく
サイトの情報をコミュニケーションするために
同じベクトルを持っているからだ。

デジタルマッツ 2002

http://www.mutts.co.jp/

「Webで雑誌を作る」というコンセプトで、マガジンハウスの「デジタルマッツ」は創刊された。ピーターはWebデザイナーとして参加。毎月の60ページから多い時は100ページもの制作をこなし、現在では、総ページ数が5000ページにもなっている。たぶん世界でも珍しい巨大なFlashサイトである。雑誌風のイメージを表現するためにFlashを使い、縦組でレイアウトを実現している

編集人:楽義一郎
AD:横井徹
De:piichi.com
E:松川哲夫

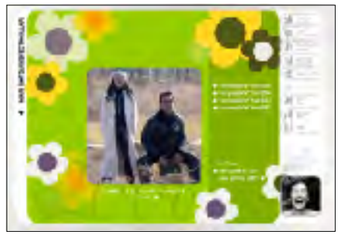


夏木マリ公式サイト 2002

http://marinatsuki.com/

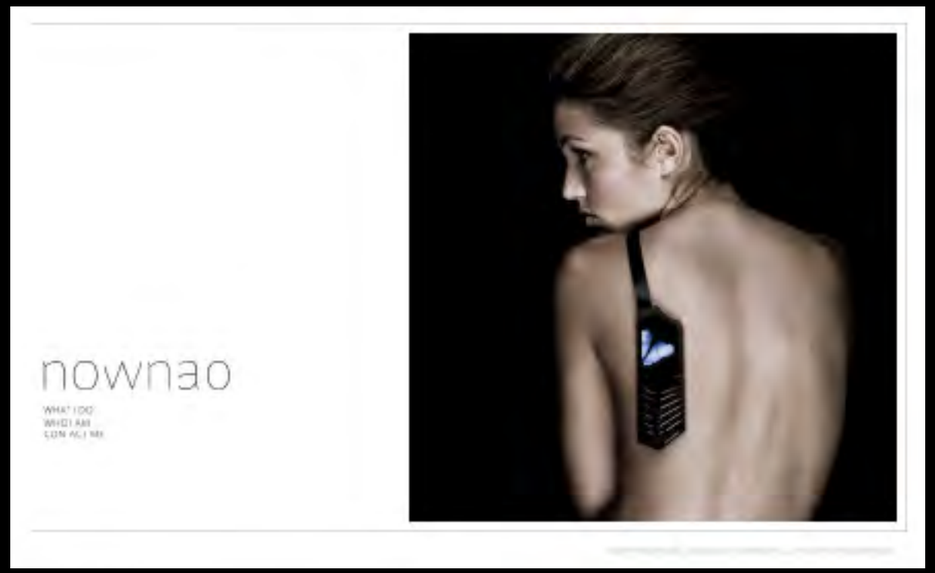
「演じる」「唄う」「創る」「語る」「伝える」「装う」の6つのテーマで女優・夏木マリ氏を表現したサイト。音楽やmovieなども楽しめ、夏木氏の魅力が分かりやすく紹介されている。また、このサイトは日本語、英語、仏語の3カ国語に対応できるのも、彼のスキルの一つだ

CL:株式会社夏木マリ事務所
CD,AD,F,HT,Ph(一部),V:piichi.com



04 finish

シンプルに3つのメニューまで絞り込まれ、小さなボタンでも現在の位置や状態がわかるようになっている。直感的に理解できるインターフェイスだからサイトの情報にダイレクトに集中できる



peter brune *making*

デザイナーの田村奈穂氏の公式サイト。
現在は東京とニューヨークを拠点に活動中の田村氏は、
2006年には坂井直樹氏によるauのデザイン・ケータイ・プロジェクト
「HEXAGON,MACHINA」のデザインを担当している。
彼女の最近作を中心に構成されたサイトは
ハイテクなスクリプトを自慢しないスマートなものに仕上げられている。

nownao 2006

http://nownao.com/

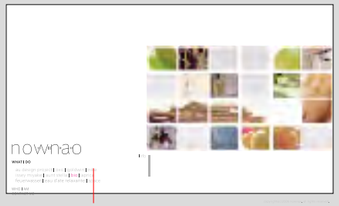
CL,GD:田村 奈穂
CD,AD,F,HT:piichi.com

01 concept talk

事前打ち合わせで内容とコンセプトを確認する。画面サイズを900×520ピクセルの横長のサイズにし、画像は500×500ピクセルの正方形で表現することを提案。田村氏からは作品をスライドショーで見せたいと要望があった。打ち合わせ段階で、ピーターの頭の中にはサイトマップと更新時も視野に入れた構造が描かれると言う

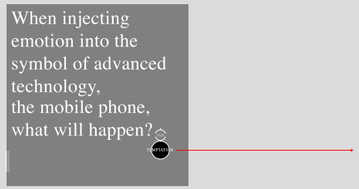
02 graphic design

田村氏からillustratorによるデザインが届けられた。彼女の作品がシンプルで力強い表情を見せている

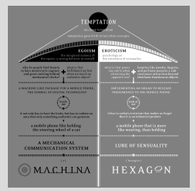


this is the dear space suits...

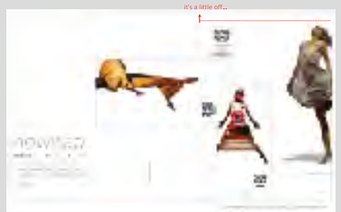
This appers 1st only if you go through from the client list of "au design project" (not from the Auto slide show)

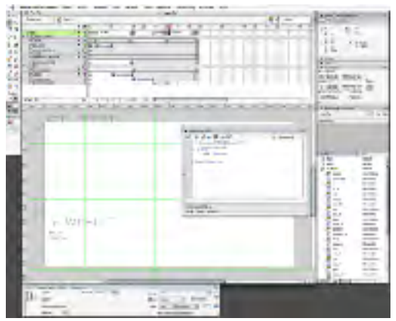


This chart appers only if you click the "temptation" icon



it's a little off...





03 flash design

サイトを見る限り、作品を引き立たすために静かな動作に徹しているが、裏ではかなり複雑なスクリプトが動いている。ピーターは作り込みながらアイデアがひらめいていくらしい